



12年前日記

2000年1月27日
(木)

山田夫妻

【2000年1月27日(木)】*2012年1月27日(金)記

10時、起床。バンコクの喧騒に徐々に頭が覚醒していくのが寝ぼけ眼にもうすぼんやり鮮明に。一晚頭を冷やして考えに考え抜いた。もう一切の迷いはない。あ、コレは夢か。ベットから跳ね起きて、バシャバシャと顔を何度も洗って、気合を入れ直す。初めて書いたが、だいたい朝は顔を洗ってたもん。ついでにジャブジャブと頭から水をかぶり、髪の毛も洗う。ブルブルブル。犬のように頭を振って、水をあたりに飛ばす。はっちゃけた！ 犬のモノマネしている今こそがドン底、よもやこれ以上、悪くなることはない。フッフ、そんなことを頭から信じるような、もう世間知らずの甘ちゃんじゃいられないくらい、酸いも甘いも噛み分け、裏も表も知り尽くし、人生の機微に泣いたり笑ったり、薄汚れちゃった。コチラとら、叩き上げだ。一回や二回の大失敗だ人生初の挫折如きで、ちっちゃくまとまってたまるか。男ならドン底でこそ、大博打を打ってなんぼ。ココが本当のドン底かまだまだ先にドツボがいっぱいあるのか、逐一この目と足でコツコツ確かめてやる。伊達に昼マックだ夜8番ラーメンで英気を養ってきたわけじゃねえ。さあ、でっかくド〜ンと試してみよう！この決断がどう転がるだろうが、どんな後悔も一片の悔いすらなし。11時、ホテルを連泊する手続きを整え(450B)、悲壮な覚悟ひとつを胸に抱き、かならずや死地へと導くであろう、あるものを得んがため、とある場所へただひとり向かった。もはや死ぬ気だった。死ぬ気になればなんでもできる。お腹が空いたら、ごはんを食べる。これ以上安っぽいことゴチャゴチャ言わせんな、仕方ないじゃん、もう決めちゃったんだも〜ん。死での門出を激しく祝うかの如く、いつも以上にタイの太陽がキラキラしてやがる。眩しいぜ、俺が、太陽如きに負けるかよ。11時30分、決死の覚悟で乗り込んだスカイトレイン(35B)が辿り着いた先は、モーチット2こと、新北バスターミナル。と思いきや詳細は省くが、ココはモーチット1こと、旧北バスターミナルであることが発覚。思いっきり間違えていたことに気付き、慌てて路線バス(3.5B)にちょこっと乗って、モノホンのモーチット2へ。今更こんな小さい嫌がらせには負けない。別にバスマニアじゃねえから、用がなきゃバスターミナルなんかに来やしない。ちなみにバスじゃ日本に帰れないぜ。大事な野暮用、そう、ちょっとした思い出作りに、取材パスがないままけんども、タイとビルマの国境の町、メソトへ、バスで、行くべき。アハッ、コレなら、入国の翌日でもできたね、一ヶ月半も何してたんだか。ウンコ漏らしたり、その類いのウンコみたいなことばかり。せめて、取材パスのたらい回しのたらいが完全に切れた1/10の翌日あたりに行けよ。そしたら、ラチャブリに駆けつけられなかったじゃん、3時のオヤツの時間にすら。もしそうだったら、どっちにしろ、ラチャブリのときはメソトにいるわけで、下手したら難民キャンプだ、ジャングルで従軍取材中で、3時のオヤツの時間にすらラチャブリにつけなかったんだよ。今更偉そうにそういうこと言わないの、自ら進んで一山幾らに定年まで甘んじる気満々の部外者どもが。後は、後は、まあ、いろいろありすぎて分からない。とにかく、入国ホヤホヤの頃と違って、俺もかなり賢くなった。最初から行きも帰りもバスに乗るつもりだ。まあ、復路は帰ればだが。片道切符になるかもしれないから、せめて行きの気分は

VIP待遇ってことで、VIPバス（420B）のチケットを入手する周到さ。キラリといぶし銀が光る、熟練の渋い技が心憎い。わびさび。上を見ちゃいけえねえ、キリがねえ。下を見ろ、しっかり下だけ見据えて、一步一步大地を踏みしめながら、やっていけばいい。この43日間の青春の日々は決して無駄じゃなかった。誰にも無駄なんて言わせねえ。それにしても一体どういう心変わりメソトへ？ 残された選択肢一つだけ、日本帰国のみと言った口が乾かない内にアレだが、実はもう一つ、メソト行きという選択肢も残っていたのだ。馬車馬のように働く。チェンマイからバンコクに戻って以来、休みなく、気が休まる暇もなく突っ走ってきたのでよし、また社員慰安旅行にいっちゃうか、ラチャブリの疲れをメソトで癒してくれ。ヨッ、社長、太っ腹！ また社運をかけて。社員とその家族の生活が両肩に重くのしかかる。いくぞ、メソト、よかった、ワンマン社長で。即断即決。経営はスピードだ。ありがとうシャチョさん。今まではいまいち踏ん切りがつかなかったのは事実だ。取材パスに未練があったのも事実だ。いやだいやだも好きの内、少なくとも仕事している気にはなるたらい回しの虜になっていたのも事実だ。もう何もかもイヤになって帰国したいと思っていたのも事実だ。後は、オッと、コレを言っちゃ〜、おしまいよ。まあ、とりあえず少なくとも事実の4連発の前には、この選択肢は捻じ伏せられざるを得なかった。心境の変化というか、最低限の職業的責任感の土壇場の発露というか、何と言うか、だって、ほら、このままじゃ、カッコ悪過ぎじゃん、いくら初取材だからって。俺にも狭い体裁世間体ってもんがあるんだから。気にしやしねえけど、言い訳くらいには役立つだろ、体裁だ世間体も。24年間、四半世紀近く、戦場だ特派員だ死ぬんだって大騒ぎしてきて、恥ずかしながら特に何をする事なく、うんこもらして無事に生きて帰って参りましたよってんじゃ、いくらなんでもねえ。まあ、最初から幻の戦場を探しにあって、結局幻の戦場は何も見つからなかったから、帰ってきちゃった、テヘッと違って。ブスだから少なくとも誰でも会えるっていう触れ込みだったから、ノコノコとタイくんだりまでやってきたのに嘘ばっかし。せめてブスの顔くらい見てやらないと気が済まない。誰にも何の期待もされていないが、日本に帰ってせめて一言くらいはいいたいじゃん。「はい、確かに仰せの通り、ブスでした。顔を見たら、もう想像以上にアレだったんで、さすがに見合いするのはやめました」。これくらいサクッと見えなきゃ、オメオメ帰るにも土産話のひとつもないんじゃ、逆に失礼だから。日本人らしく礼儀やしきたりを大事にし、見栄や体面体裁を重んじる路線でいくことに。そういうのを一切合財全部ひっくり返して、メソト行けば、なんとか形らしいもんになるんじゃねえ、筋は通るんじゃねえ、ケジメはつくんじゃねえ、義理人情、よく知らねえけど。まっとうな自称プロ戦場特派員を満足させてくれるはず、国境の町メソトならば。男の責任として、勘違いとは言え、その気にさせた筋として、カレンをやり捨て（ヤッてないけど、見合いすらしてねえし）するわけにはいかないから、ちゃんとお別れしなきゃな。まあ、この期に及んで、この人、まだ照れ隠しでカッコつけてますが、ぶっちゃけ正直、野心もあった。うまい話が転がっていないかと、もう一回棚からぼた餅が落ちてこないかなあ、人生最初で最後のビックチャンスよ、もう一度、おかわりって言う偉大なる野望が見果てぬ大志が。もしかしたら、トントン拍子に許可なくコッソリ潜り込んだ難民キャンプでバレることなくコッソリ潜入取材を続け、カレンに渡りをつけられて、トントン拍子にジャングルで従軍取材できちゃうかもよ。村一番の出世頭だ！ そしたら、取材パスなんてな

くても、逆によかったってことになるもんねえ～、死ね、取材パスを出さなかった、内務省、俺はお前らを絶対に許さない、もう全部お前らのせいだ、じゃあ、そういうことでよろしく（右に同じ、2012年の俺も）。そんな熱血タイムな理由で、買うもん買ったので、頭冷やしがてらバイクタクシーこと、モトサイ（30B）で汗ばんだ体にヌメッとまとわりつく熱風に吹かれながら、最寄り駅まですつとばす。13時、バンコクで残された時間、いや、もしかしたら人生に残された時間も後わずかかもしれない。一秒たりともおろそかにはできない。その足でまたスカイトレインに乗って（35B）、紀伊国屋へ行き、人生最後になるやも知れないスピリッツ（176B）。そして、人生最後になるかもしれない昼マック（90B）しながら、人生最後になるかもしれない読書。腰を落ち着ける間もなく、立て続けに人生最後になるかもしれない3時のオヤツはダンキン（33B）しながら、読書。17時、体力温存のため、いつもだったら歩く距離もスカイトレイン（15B）で時間を稼ぎ、ホテルに戻る。人生最後になるかもしれない昼寝を楽しむため、しばし今生の別れにまどろむ。19時30分、昼寝から起き、人生最後になるかもしれない夕飯の夜8番ラーメン（103B）。ブラブラと夜の流す。明らかにホモのクネクネした細い男に微笑まれる。人生最初で最後になるかもしれないアレをすることないまま、最近足が遠のいていたセブンイレブンにて、人生最後になるかもしれない贅沢としてガムを買う（10B）。21時、ホテルに戻り、人生最後になるかもしれないクチャクチャとガムを噛みながら、パッキングしていて、VIPバスのチケットが明日の夜、21時30分発なのに気付く。まだ明日一日はバンコクで時間つぶし暇つぶしをしないやんけ。関西弁で書いたから爆笑もんだならきょうと。3時、コレだけは本当に人生最後になるかもしれない夜更かしを楽しんだ後、ようやく就寝（この後、夜更かしだらけの人生です。2012年の未来の俺でした、追伸もうすぐまたしても事件が立て続けに起こる予定。ちなみに明日は何も起きませんよ。あら、余計な予告だったかしらん）。

○本日の出費、「計算するのが面倒臭いから、各々で適当にしといてよ」B。ついでに一日の流れも「いちいちうっとうしいから誰か簡単にまとめといて」ジャ～。

『12年前日記 2000年1月27日(木)』

<http://p.booklog.jp/book/43317>

著者：山田夫妻

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yamadafusai/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/43317>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/43317>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.